



江南小だより

八戸市立江南小学校 学校だより
令和5年12月22日発行
通算第553号

一陽来復

校長 笹川 力

「一陽来復（いちようらいふく）」は冬至のことを意味します。秋から冬に向かって太陽が出ている時間が少しずつ短くなっていき、冬至で一つの頂点に達し、その後少しずつ昼が長くなっていくことを述べた言葉です。今年の冬至は12月22日、まさに今日です。

冬至の日、日本では昔からの風習として、カボチャを食べたり柚子湯に入ったりして健康と長寿を願いました。また、冬至が最後の節気にあたるため、「ぎんなん」や「れんこん」「みかん」など「ん」のつく食べ物を食べて縁起を担いでいたそうです。中国では冬至に家族団らんで水餃子を、台湾では白玉粉で作られた丸い団子を、韓国では邪気を払うため小豆粥を食べているようです。北欧ではYule（ユール）という祭りがあり、日中でも陽が昇らない「極夜」に木の幹を燃やして太陽の復活を祝う儀式を行っていました。それに由来する「ブッシュ・ド・ノエル」は木の幹を模したクリスマスケーキとして今でも親しまれています。



◆ ◆ ◆
「一陽来復」は、陰の気が極まって陽の気に転じる意から、悪いことが続いた後で幸運に向かうことを表す意味でも使います。私はこの言葉が好きです。その日その日は、晴れの日、雨の日、暖かい日、寒い日、さまざまあつて行ったり来たりするのですが、冬至までは夜が長くなっていくものの、その後は確実に陽が長くなっていく。辛抱強く闇に耐えながら、それを極めると必ず陽に転じることが約束されている。そんな安心感をこの言葉から感じます。

◆ ◆ ◆
さて、大きな困難に直面した人は、そのたいへんさが極まったときに成長に転じると言われています。しかし、その成長に転じる「点」がいつなのか、後になって振り返らないと分からないことがほとんどです。悩んでいる人に「今が底だから、明日から確実によくなるよ」と言えたらどれだけいいでしょう。天気が行きつ戻りつするように、人は大小の悩みに日々向き合いながら少しずつ変わっていきます。それが、三寒四温のように確実に良い方向に向かっているのであれば、かなり困難なことでもがんばれます。けれども、この苦しみがどこまで大きくなるのか、いつまで悩まなければならないのか分からないからつらいのです。

しかし、東洋にも西洋にも、古くから幸福と不幸の総量は同じだという考えがあります。

◆ ◆ ◆
今、直面している悩みは将来の幸福のための布石なのだと考えると少しは気が楽になります。登るだけの坂道はありません。それでも、転換点を見極められないからこそ寄り添う誰かが大切なんですね。

